

# 博士学位論文審査要旨

2012年7月4日

論文題目： 日本児童文学の読者論的研究—明治二〇年代から昭和初期まで—

学位申請者： 王 瑜

審査委員：

主 査： 文学研究科 教授 真銅 正宏

副 査： 文学研究科 教授 田中 励儀

副 査： 文学部 准教授 西川 貴子

要 旨：

本論文は、明治中期から昭和初期の日本児童文学を対象とし、作家や作品ではなく、読者の読書行為を中心に据える読者論という方法論によって、これらを再検討する試みである。

児童文学の読者は、いうまでもなく、基本的には年少者である。ここに、この研究の最大の困難が存している。児童の読書の実態は、学術的論文はもちろん、あらゆる形式の言説において残りにくい。このことが、日本児童文学の研究を、これまで、大人の視線からの限定した議論に留めてきた。学位申請者は、このような非児童による日本児童文学研究に一石を投じるべく、〈子ども読者〉という概念を導入し、児童文学史の見直しを図っている。

児童の感想文や、回顧的に幼少期の読書体験を振り返る文章などを丹念に集積し、実態的な〈子ども読者〉の読書行為の再現に努める一方、その資料的な不足を補うべく、作品の側から期待される内包された読者像を、作者や編集者の側の言説を通じて明らかにし、子供と大人の双方から、より精密な読書の状況を検討する。これらにより、無批判的に古典的な名作とされてきた作品群や雑誌の評価に疑問を呈し、また低俗とされてきた作品群や大衆児童雑誌の再評価を試みる。

本論文は、第一章から第六章までの本論に、序章と終章を加えた、全八章から成る。まず序章において、これまでの日本児童文学の研究史の問題点が丁寧に整理される。第一章は、「日本創作児童文学の第一作」とされてきた巖谷小波の「こがね丸」の分析を通じ、当時の〈子ども読者〉の受容と文化環境・文化慣習との響き合いについて触れる。第二章は、やや巨視的に、明治・大正期において、立身出世や人権尊重など、時代の文脈と作品内容との相関について論じる。第三章は、これまで日本児童文学の「古典的名作」とされてきた雑誌『赤い鳥』について、発行部数の比較や読書経験の言説などから、実際には、たとえば同時代の『少年倶楽部』などより不人気であった可能性について指摘する。第四章は、『赤い鳥』の自由主義的・進歩主義的な性格を際立たせ、その教育の理念の側面と、読者の受容の不均衡について述べる。第五章と第六章においては、大衆児童文学という、これまでの児童文学史において軽視されてきたものを扱い、現実的には、これらが、当時の〈子ども読者〉の読書志向に大きな影響を与えてきたことを述べる。具体的には『少年倶楽部』や佐藤紅緑「あゝ玉杯に花うけて」、および江戸川乱歩の少年探偵団シリーズなどを扱う。

長い期間にわたる児童文学を対象としているため、やや恣意的な対象選択も見られたが、ひととおり日本近代の児童文学を通観し、これらが抱えている問題点について、読者論という一貫した方法論で取り扱い、新たな視座からの研究成果を示した点は、十二分に評価できる。

よって、本論文は、博士（国文学）（同志社大学）の学位を授与するにふさわしいものと認められる。

## 総合試験結果の要旨

2012年7月4日

論文題目： 日本児童文学の読者論的研究—明治二〇年代から昭和初期まで—

学位申請者： 王 瑜

審査委員：

主 査： 文学研究科 教授 真銅 正宏

副 査： 文学研究科 教授 田中 励儀

副 査： 文学部 准教授 西川 貴子

要 旨：

学位申請者に対して、2012年6月23日（土）、13時より約2時間にわたり、博遠館1階会議室において、公開で総合試験を行った。

専門分野に関する試験については、学位申請論文について、タイトルおよび章構成の意図、序章から終章にいたる全八章それぞれの内容についての論旨の確認、先行研究との関係、および本論の特長と研究史における価値等について、質疑応答を重ねた。すべてについて、的確な応答がなされ、学位申請者の、本論文が対象とする研究内容についての深い理解と、周辺分野への幅広い見識とが確認された。

また、語学（英語および日本語）についても、十分な理解力と運用能力、および表現力があることが認められた。

よって、総合試験の結果は合格であると認める。

## 博士學位論文要旨

論文題目： 日本児童文学の読者論的研究 ―明治二〇年代から昭和初期まで―  
氏名： 王 瑜

### 要 旨：

本論文は、今日の児童文学史に「古典的名作」として登録された作品、また逆に重要ではないと判断され抜け落ちた作品を、〈子ども読者〉論の立場から再検討したものである。単なる〈子ども読者〉やその読書にかかわる資料の調査や分析にとどまらず、従来の研究にある「大人／子ども」の二項対立的な思考構図から脱却するために、〈子ども読者〉を歴史的・社会的な変化の中で生まれてくる、その都度の身体を備えた歴史的存在者として捉えた。これにより、児童文学における読者の研究に新たな方法を提示するとともに、日本児童文学史という学問領域及びその編纂方法の見直しをはかる。

序章では、〈子ども読者〉に関する研究の流れとその用語の使い方を概観し、そこから導き出された本論文の課題とそれを解決するための立場を論じた。本論文が目指す〈子ども読者〉論は、〈子ども読者〉自体の解明ではなく、それを方法として、既存の考え方からは見出し難かった問題点を提起すること、既存の研究方法を疑い、問い直し、新たな視点を見つけることである。〈子ども読者〉論とは、目的ではなく、立場であり、方法である。こうしたスタンスは、第一章から第六章まで一貫している。

第一章は、「日本創作児童文学の第一作」と言われる巖谷小波の『こがね丸』を分析対象に据えた。この作品は、日本で最初に子どものために創作された文学作品として、児童文学史上の先駆的意義が認められている一方で、内容と文体の古さをめぐって、発表当時から多くの批判を受けている。しかし、作品が発表された明治二〇年代の時代背景と、読者層である〈子ども読者〉の享受相に視座を置きつつ考察することを通して、その内容も文体も、当時の子どもが浸っていた文化環境、文体習慣に相応したものであることが明らかになった。

第一章で微視的な視点から特定作家の一つの作品について考察を行ったのに対して、第二章の試みは、明治大正期の児童文学全体を俯瞰する巨視的な視点によるものである。従来の研究は、明治期と大正期の児童文学における子どもへのまなざしに大きな相違があったという点で一致している。確かに明治期の児童文学に見られる立身出世を期待する大人のまなざしと比べると、大正期の児童文学は大きく異なった系譜において成立したものに見える。しかし実際は、大人側が思い描く理想の子ども像を子どもたちに押し付けようとする発想の原点も、子どもの人権を尊重しようとしめない立場を取っている点もまったく変わらないのである。すなわち、この異質なものに見える二つの態度は、いずれも「発達」という視点でしか子どもを捉えておらず、その底に児童文学を通して子どもを育てようとする欲望を隠し持っている。

第一章と第二章でのアプローチが、主として作者の対読者意識との関係の中で〈子ども読者〉を考察するものであるのに対し、第三章以降は、〈子ども読者〉そのものと、作品の具体的な読まれ方に焦点を当てる試みとなっている。

第三章と第四章は、児童文学史で高く評価されている日本児童文学の「古典的名作」の実態究明を目的とし、『赤い鳥』を例に挙げて検討するものである。

まず明らかにしたのは、『赤い鳥』が、「芸術」的な児童文学を追求しようとし、文壇諸大家の参加によって児童文学の質的な向上を実現させ、対世間的な意味における児童文学観を改めさせる契機を創った一方で、現実においては、多くの子どもの読書興味を引き出しにくいものであったという点だ。『少年倶楽部』が煽情的軍国主義への道を辿ってしまったのに対して、『赤い鳥』

に現われた平等、友愛、寛容のモラルは、今日の児童文学観と合致している。これは『赤い鳥』が文学史的に極めて高い評価を得ている大きな理由の一つといえる。児童文学史の叙述の対象が、すでに完結した過去の時代の作家と作品に限定されるのは当然のことであるが、その時代の文学が発展する時点では見えない傾向や、次の時代の作品に与えた影響は、歴史の流れにつれて次第に明白になってくるため、文学史家は前後の因果関係を配慮しつつ、歴史事実を新たに組み立て直す（過大過小評価したり、選別したり、抹殺したりする）ことができる。ここで注目したいのは、『赤い鳥』と『少年倶楽部』に象徴されるように、一部の作家と作品の価値決定とひきかえに、それ以外の作家と作品が無視され、抹殺されているという事実だ。本来の享受者であるはずの〈子ども読者〉による読まれ方に即して、これらの作品の評価を訂正する必要がある。

第四章は、そうした〈子ども読者〉の読み方に目を向けたものである。文学史の主流意見に対して、『赤い鳥』は国家主義・植民地主義色の強い雑誌であるという反論が一部の研究者から試みられたこともあった。この全く相容れないともいえる二つの傾向が同時に『赤い鳥』に存在するという事実を理解するために、歴史童話、実話、科学説明文に着目して考察を加えた。これらの作品表現の際立った特徴は、「歴史」「実話」「科学」という角書の明示に支えられ、進歩主義的な視点によって構成された内容を、理性的な語り口で、客観的事実や科学的知識として定着させていくことである。『赤い鳥』は、西洋近代的な価値観に基づくヒューマンイズムを描く作品を載せながら、一方では歴史童話、実話、科学説明文のような作品を掲載することで、先進文明への憧れを読む側に喚起すると同時に、先進／未開の対立自体に読者の関心を振り向け、偏見と差別を引き起こす。第四章では、以上のレトリックの存在を確認した。これこそが、『赤い鳥』の自由主義・進歩主義が、国家主義批判や植民地主義批判のように見えて、実は平等主義の鼓吹として差異や差別を目立たせるものであることを証しているとも言える。さらに、同様なレトリックが綴方の指導方針にも見られる。「読む―書く」という循環を通して、『赤い鳥』作品の内容から形式まで、〈子ども読者〉が無意識のままにその再生産を果たしていたのである。

第五章と第六章では、従来の児童文学史において重要ではないと判断され、そこから抜け落ちた作品について検討した。

第五章ではまず、『少年倶楽部』の作品群に代表される大衆児童文学が、長い間文学性の低いものとされ、高い評価を得ることがなかったという事実を確認した。その上で、大衆児童文学独自の「文学性」は、作者と読者の相互関係において、〈子ども読者〉の属する文化と時代のコンテキストやコードが、いかに表現され、いかに読者の共感を得ることができるのかという点に認められる、と論じた。次に、具体例として、佐藤紅緑の「あゝ玉杯に花うけて」を検討した。向学心を持つ貧しい独学少年が多かったという社会状況は、主人公の人物造型と密接な関係があり、野球が青少年の間で盛んになったという世相が、物語展開の推進力となっている。〈子ども読者〉は読書の過程で、自分の知識を総動員しつつ作品の意味を捉えようとしている。そして、作品世界を自分が生きている現実世界に投影しながら、作中に惹きつけられるのである。この読書体験は、読者があらかじめ抱いている期待に応えるものであり、読者は作者と共通のコンテキストとコードを読み基礎としている。

第六章では、江戸川乱歩の少年探偵団シリーズのうち、戦前の四作について検討することを通して、なぜこのシリーズが発表当時から子どもたちによって支持され読み継がれているのか、その理由の解明を試みた。少年探偵団シリーズの作品構造で注目すべきは、探偵／怪盗という対立項の人物設定、読者と等身大の探偵団員の人物設定、描かれた世界におけるルールの明瞭さ、といった点である。こうした構造の展開は、少年探偵団シリーズを読む行為に〈遊び〉の特徴を付与することとなる。昭和初期の〈子ども読者〉にとって、日常生活環境にある駄菓子屋、路地や原っぱをはじめとした遊び場などの場所、また、当時流行っていた「探偵ごっこ」という遊びが、テキスト空間と現実空間の橋渡しとして機能している。これらにより、少年探偵団の物語を読む際に、少年探偵団と二十面相の対決が鮮明なリアリティを持つ。読書行為と〈遊び〉行為は、互

いにかげ離れたものとして存在しているのではなく、両者が相互に交差し、重なり合っているの  
である。戦後、昭和初期の風景はほとんど失われたが、ラジオ、テレビ、映画、漫画、ゲーム機  
といった新しい媒体を介することによって、少年探偵団シリーズは今日に至るまで読み継がれて  
いる。

終章では、各章で明らかになったことを要約し、本論文では十分に論じられなかった問題点を  
今後の課題として述べた。